

通機会会員の皆様へ

三愛電子工業株式会社 寺井 一郎 (1983 年卒)



この度、通機会第 8 期(2010 年 6 月 -2014 年)の会長職を拝命いたしました。今年は機械系学科創設 50 周年の年で、この時期に会長を務めさせて頂くことは、大変光栄なことです。この 4 年間、副会長の下条誠先生(1973 年卒、電気通信大学大学院)、

高橋千織様(1987 年卒、独立行政法人海上技術安全研究所)、監査の伊藤秀樹様、上村拓人様及び学内外の幹事(47 名)の皆様とともに、通機会のますますの発展のために、微力ながらお役に立てればよいと思っております。宜しくお願い申し上げます。

さて、通機会はこの 50 年で、会員総数が 5,882 名(5 月末現在)になりました。そして活動規模は、一期 4 年の会計収支で実質約 5 百万円になっています。今の通機会があるのも、この 50 年の機械系学科の先生方、卒業生の多大なご協力があったからだ痛感しております。なお、第 8 期の主な活動には、WEB コミュニケーションを使った OB との交流企画、田中榮賞における受賞者の組織化による WEB での情報発信や通機会だよりへの寄稿及び特別講演などがあります。(通機会 HP; <http://www.tsukikai.mce.uec.ac.jp/>)

この 50 年の機械系学科の変遷にふれたいと思います。既に色々なところでご説明がありましたが、1960 年の通信機械工学科創設以降、1966 年に機械工学科、1974 年に機械工学第二学科増設、1987 年に機械制御工学科、1999 年に知能機械工学科、そしてこの 4 月に学部名が変わり情報理工学部知能機械工学科となりました。学科の変遷は、言うまでもなくその時々時代の背景によるものと思います。私見ではありますが、日本の高度経済成長期に学科が創

設され、機械工学科になり、ロボット・メカトロニクス・パソコン時代になって機械制御工学科になり、その後、機械工学も「油のにおい」から、インターネット・デジタル化により変化し、知能機械工学科になったように思います。そして、こうした約 10 年ごとの学科の変遷は、次の 10 年、一世代先へつなげるためのものだと感じます。

ここで、簡単に自己紹介をさせていただきます。機械系学科が創設された時に生まれ、感慨深いものがあります。梶谷誠先生の研究室を 1983 年卒、85 年に修士を修了いたしました。研究テーマは、学部・大学院を通し「等速直線運動機構」でした。直線空気軸受けを使って、毎秒 10mm 以下といった低速で、等速運動させようというものです。1985 年に伊藤忠商事株式会社に入社し、産業用ロボットの米国自動車会社向け輸出、米国製ソフトウェアの輸入国内販売、アジアでの情報通信関連会社の M&A、LONDON 駐在(コンピューター周辺機器の欧州での代理店展開)、NY 駐在(インターネットサービスプロバイダーである株式会社インターネットイニシアティブの米国法人 IJ America Inc. 勤務)の後、2004 年に帰国し現在に至っております。今は中小企業の経営に携わり、主に鉄道の駅用システムを開発製造販売しています。お蔭様で、関東の私鉄全てに導入頂き、駅数で約 50% のシェアをもっております。

今回、通機会のお手伝いをさせていただきますが、今までは「通機会だより」を読むくらいでした。卒業後 20 年程は仕事に無我夢中で、正直なところ通機会に参画する余裕がありませんでした。多くの卒業生も私と同じではないでしょうか? 会長をお引き受けするというので、先日来、通機会の活動を色々教えて頂きました。お恥ずかしい限りですが、知らなかったことが多くありました。通機会は、在学生、卒業生(学士、修士、博士)、現・旧教職員が会員となっておられます。この「人のネットワーク」はかけがえのないものです。電気通信大学の同窓会である目黒会との相乗もなくてはなりません。そして新生情報理工学部知能機械工学科は、名前としては同じ知能機械工学科となっていますが、学科が継承

通機会だより第 34 号の主な内容

- 通機会会員の皆様へ…1、 第 8 回通機会総会開催報告…2、 通機会会則…3、 通機会第 8 期役員…4、
- パネルディスカッション…4、 第 7 期通機会決算・第 8 期通機会予算…8

されたということではなく、旧知能機械工学科と旧電子工学科、旧システム工学科の一部の先生方が加わり、新しい知能機械工学科ができたと伺っております。従い、機械系学科創設 50 年の歴史を大切にしつつ、時代の移り変わりの中で、通機会もますますの発展のために変わっていかねばならないと思います。未だに混迷している政治や回復が必要な経済など、不安定な社会情勢の中、技術研究への「志」をもって、更なる通機会会員の団結と発展を次の 50 年につなげなければならぬと思っております。

第 8 回通機会総会開催報告

副会長 下条 誠 (1973 年卒)

平成 22 年 6 月 26 日 (土) 午後 2 時より、電通大東 5 号館 341 室におきまして、第 8 回通機会総会が開催されました。出席者は、OB・職員・在校生を含め 45 名でした。当日は、通機会総会、パネルディスカッション、懇親会が行われました。その内容は次の通りです。

通機会総会

はじめに、第 7 期副会長の金森哉吏氏 (知能機械工学専攻准教授) より開会の挨拶があり、続いて議長選出が行われ、松村隆氏 (知能機械工学専攻准教授) が選出されました。ついで、第 7 期会長長竹和夫氏 (日本精工) より挨拶がありました。その後、金森哉吏氏より第 7 期活動報告がなされました。活動報告内容は以下の通りです。

- ・通機会だよりを 29 号～33 号までの 5 号を発行
- ・特別講演会を 2 回開催
- ・田中榮賞授与式を 4 回開催、25 名が受賞
- ・幹事会を 5 回開催
- ・通機会会の現会員数は、5,882 名 (内訳：卒業生 4,863 名、大学院学生 214 名、学部学生 686 名、教職員 (体育を含む) 53 名、元教職員 (体育を含む) 107 名)

引き続き、会計の長塩知之氏 (知能機械工学専攻助教) より第 7 期会計報告がなされ、監査の瀧澤正和氏 (日本 IBM) より監査報告がなされました。会計の使途、決算内容について承認されました。

次に、会則改正の提案がありました。これは 1999 年の改組により学科名が知能機械工学科になり、学生の年次進行に伴う会員定義に係るもので、満場一致で可決されました。ついで、第 8 期の役員改選が行われ、寺井一郎氏 (三愛電子工業) が第 8 期通機会会長に選出されました。また 伊藤秀樹氏 (東芝)、上村拓人氏 (トプコン) が第 8 期通機会監査に選出されました。役員改選を受け、新会長の寺井



一郎氏より、第 8 期の会長就任の挨拶がありました。また、副会長を高橋千織氏 (海上技術安全研究所) と下条誠 (知能機械工学専攻教授) に、この他学内幹事を委嘱しました。

引き続き、副会長より総会資料に基づき第 8 期活動計画の説明があり、総会資料原案に、金森哉吏氏より提案された学位取得者のネットワーク体制構築のための活動を加え、満場一致で承認されました。また長塩知之氏より総会資料に基づき第 8 期予算案の説明があり、原案通り承認されました。(参加者 45 名)

50 周年記念式典

今回、通機会総会に引き続き、機械系学科創設 50 周年を記念して記念式典が行われました。式典は、第 1 部式典と第 2 部パネルディスカッションとなっています。

第 1 部式典では、まず旧知能機械工学専攻主任の村田眞氏 (知能機械工学専攻教授) から挨拶を頂き、次に来賓として梶谷誠氏 (電気通信大学学長) と寺井一郎氏から挨拶を頂きました。この後、記念品贈呈となり 50 周年記念通機会会員名簿が、通機会会長の寺井一郎氏から、専攻主任村田眞氏へ贈られました。続いて、歴史資料の紹介として、通機会誌創刊号の田中榮先生の手記にまつわる話を金森哉吏氏から、機械工場の創設に関する興味深い話を松村隆氏から提供頂きました。この後、機械系学科研究室の 50 周年史と OB 交流企画の制作発表がありました。企画意図の説明を金森哉吏氏から、機械系学科年表 WEB サービスについての概要説明が渡辺滋氏 (イオマガジン) からありました。





第2部パネルディスカッションでは「知能機械工学科の進化と未来」と題して、教育に焦点を絞ったディスカッションを行いました。まずオープニングトークでは下条から今回のテーマでの問題設定について述べられ、その後、酒井拓氏（電気通信大学学長特別補佐）から、本学を取り巻く環境について話を頂きました。本学は大胆な改組を行い、H22年度から従来の7学科から4学科への変更それに伴う各種の変化、および人事制度等の大幅な変更を行い、それらについて解説を頂きました。またこれに関して新専攻/新学科に係ることを石川晴雄氏（知能機械工学専攻教授）から説明頂きました。最後に総合討論として、本学科の高い理想・目標を達成するために、本学科の教育は如何にあるべきかについて、会場からOB、教員、在校生から活発な討論を頂き、大変盛り上がった議論が続きましたが懇親会の時間が迫ってきたため、残念ながら終了となりました。（参加者52名）

懇親会

パネルディスカッション後、会場を大会館3階のレストラン『ハルモニア』に移して、懇親会を行いました。村田眞氏挨拶の後、目黒会会長の安田耕平氏（キャンパスクリエイト）の挨拶、OB教員である越智保雄氏の挨拶、第8期通機会会長寺井一郎氏の挨拶があり、1期生の菊池正雄氏（1964年卒）の乾杯で和やかな懇談に入りました。その後祝宴スピーチとして、卒業生の中から10年おきに、鈴木喜一氏（1974年卒）、三宅基夫氏（1985年卒）、榊原正博氏（1995年卒）からご挨拶を頂きました。最後に元通機会会長中山良一氏の挨拶で盛会のうちにお開きとなりました。（参加者49名）



通機会会則

第1章 総則

- 第1条 本会は通機会と称する。
- 第2条 本会は会員の連絡と親睦をはかることを目的とする。
- 第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。
1. 会報その他の発行及び配布。
 2. 講演会、見学会、親睦会の開催。
 3. その他本会の目的を達成するのに必要な事業。
- 第4条 本会は事務所を電気通信大学知能機械工学科内におく。
- 第5条 この会則に必要な通則は幹事会にて決める。

第2章 会員

- 第6条 本会の会員は次の通りとする。
1. 電気通信大学通信機械工学科、機械工学科、機械工学第二学科、機械制御工学科、知能機械工学科の卒業生ならびに同専攻科もしくは同大学院同専攻の修了生。
 2. 電気通信大学知能機械工学科ならびに同大学院同専攻に在学する学生。
 3. 上記各学科もしくは専攻の現教職員及び旧教職員。
 4. その他幹事会で適当と認めたもの。

第3章 役員

- 第7条 本会に次の役員をおく。
- 会長1名、副会長2名、幹事 若干名、監査2名、クラス委員 各クラス1名。
- 第8条 会長及び監査は総会において会員中より選出される。
- 第9条 副会長及び幹事は会長が委嘱する。
- 第10条 クラス委員は各クラス毎に選出する。
- 第11条 会長は本会を代表し、副会長は会長を補佐する。
- 第12条 幹事は幹事会の議に沿って会務を処理する。

第13条 クラス委員は各クラスと幹事会との連絡を密にする。

第14条 監査は会務を監視し総会に報告する。

第15条 役員任期は次の通常総会までとする。

第4章 総会及び幹事会

第16条 本会の最高決議機関を総会とする。

第17条 総会はその議案、日時、場所を会員に周知したうえ会長が招集する。

第18条 総会の議事は出席者の過半数によってこれを決める。

第19条 通常総会は4年に1回開く。

第20条 会長が認めた時または、会員の50名以上から請求があった時は臨時総会を開く。

第21条 幹事会は会長が必要と認めた時に招集する。

第5章 会計

第22条 本会の経費は終身会費、寄付金、その他をもってこれにあてる。

第23条 本会の会計はその収支決算を通常総会において報告しなければならない。

第24条 終身会費は金壱万円とする。

第6章 付則

第25条 本会の会則の変更は総会の決議を必要とする。

第26条 本会則は昭和56年3月7日より施行する。

付記 平成2年6月23日一部改正。

付記 平成6年5月14日一部改正。

付記 平成14年5月18日一部改正。

付記 平成18年5月27日一部改正。

付記 平成22年6月26日一部改正。

通機総会第8期役員

(2010～2013)

会長 寺井 一郎 (83年)

副会長 高橋 千織 (87年)、下条 誠 (73年)

監査 伊藤 秀樹 (93年)、上村 拓人 (99年)

<学外幹事>

1964年 大賀 寿郎、梶谷 誠、菊地 正雄

1965年 下河 利行、灰塚 正次、横内 康人

1966年 渡辺 彰三 1969年 坂田 芳幸

1970年 島野 圭司、益田 正

1973年 中山 良一、丸田 芳幸

1974年 鈴木 喜一

1975年 金田 徳也、長竹 和夫

1976年 市毛 嘉彦 1978年 狩集 二郎

1979年 長野 滋

1980年 宇野 英男、紀井 敏

1981年 瀧澤 正和 1982年 岸本 哲

1983年 寺井 一郎、東木 達彦

1985年 三宅 基夫

1987年 高橋 千織、中野 禅

1989年 植村 幸生 1992年 大串 浩司

1993年 伊藤 秀樹 1994年 川邊 栄二

1995年 角屋 治、榊原 正博

1998年 鈴木 英之 1999年 上村 拓人

2000年 牧山 高大

2002年 大熊 俊司、木之本 剛

2003年 久芳 康弘 2005年 佐藤 千尋

2006年 茂木 俊輔 2009年 高久 雄一

<学内幹事>

1971年 小泉 博義

1972年 石川 晴雄 (講演会)、村田 眞

1973年 下条 誠 (講演会)

1987年 金森 哉吏 (会計、講演会)

松村 隆 (会員管理)

1989年 結城 宏信 (庶務)

1993年 森重 功一 (だより)

1996年 長塩 知之 (会計)

2000年 大竹 博 (だより)

※ 記載年は学部卒業年

通機総会・機械系学科創設 50周年記念式典に参加して

通機総会・機械系学科創設50周年記念式典の参加者から、大賀寿郎氏、三宅基夫氏(ジーダット)、畑元氏(知能機械工学科3年)の御三方に今回の総会、50周年記念式典、パネルディスカッションで感じたことを一筆お寄せ頂きました。また、渡辺滋氏(イオマガジン)に50周年記念式典の感想と「機械系学科研究室Web版50年史」企画についてご紹介いただきました。



「通信機械工学科」創設期の思想は先見性だった

大賀 寿郎 (1964 年卒)

1960 年に入学した通信工学科の第 1 期生が先生方から繰り返し聞かされたのは、「我が学科はこれまでに類のない先見性を持つ学科なのだ」ということだった。その内容は大まかに 2 つの事項から成っていた。

1. 「従来の機械工学科から流体力学と熱力学を外して精密機械工学のみとし、代わりに電気・電子工学の基本を導入する」

油まみれをよしとした旧来の機械工学科を持たなかった本学ならではの思想だった。実際、機械系技術では一般的な設計法、加工などのほか振動関連の講義が充実していた。また電磁気学、電気回路、電子回路も通信系の学生と同じように鍛えられた。

こうした思想は実験や演習にも反映された。工学実験では当時最先端の計測器だったトリガ機能を持つオシロスコープ（当時の商品名はシンクロスコープ）が配備されており、実験担当の教官は学生たちにこう言った。「通信機械工学科の諸君はシンクロスコープに習熟しておきなさい。これから機械測定はどんどん電子化されるからね」

その後の機械工学分野では非周期の繰り返し現象の動的解析が必須となり、トリガ掃引を持つオシロスコープが極めて便利な道具とされて高級な分析器にもその機能が採用されている。今顧みてその教官の先見性に感心させられる。

本学の機械工学科がその後のコンピュータの普及を追い風として世の中でユニークな地位をしめるに至った要因は、こうした工学の将来を見据えた確かな先見性だった。

2. 「これからの機械工学者には材料の知識が必須である。これを強力に取り上げる」

この思想の下に実際に組まれた授業は量子力学、気体分子運動論、有機電子論といった材料学の基礎だった。我々は例えば水素原子の電子軌道の波動関



数を球座標を用いて解析的に解くというような授業をじっくり受講した。

当時、半導体の普及により量子力学は電子工学の基盤技術の地位を獲得していた。次は機械工学、という人々の漠然とした期待があり、我が通信機械工学科はそれを具現するものとされていたのだった。講師で来ていた他大学の機械工学科の教授はこういっていた。「量子力学を知っている機械工学者がどんな仕事をしてくれるか、楽しみですな」

今振り返るとこの思想はどうやら「跳び過ぎ」だったようで、我々学生たちはおよそ機械工学らしくない計算にやや戸惑ったものだが、筆者は卒業後に音響研究者となり、ここで学んだ解析数学が貴重な知識として役立っている。

あれから 50 年を経過した。今は知能機械工学科の看板を掲げている我が学科は、上記のような確かな先見性とその後社会情勢に即応した体質改善が実を結び、世の中でユニークな学科という定評を獲得した。

一方、将来への発展に対していくつかの問題点が指摘されている。中には学生の学力低下のような緊急の難問もある。

しかし、学生の学力低下はどこの大学でも課題となっており、我が学科のみの課題ではない。本来電通大全学の課題として集中的に対処すべき問題だろう。

いま我が学科に課せられている喫緊の課題は、新しい先見性の樹立ではないだろうか。

50 年前に先見性を発揮した機械と電気電子との融合という我が学科の思想は今や世の中の常識となった。それに代わる先見的な思想、50 年後に常識となるような思想は何か？ 残念ながら 50 年前ほど明瞭ではないように見える。先生方は 50 年前の先生方のように学生たちに、「我が学科はこれまでに類のない先見性を持つ学科なのだ」と情熱的に語る事が出来ているだろうか。現役の学生諸君は 50 年後に、自分の学んだ学科の先進性に感心してくれるだろうか。

来るべき 50 年先を見据えていま打ち出すべき工学の将来像はどのようなものか、若い先生方を中心に意欲に満ちた討論をお願いしたい。「知能機械ルネサンス」を先導していただきたいのである。他分野の専門家の参加は歓迎であろう。50 年前の基礎材料論のような「跳び過ぎ」も有ってよいと思う。

我々年寄りも必要に応じて討論に参加できれば幸いである。邪魔はしないつもりですが。

改めて感じた大学に期待する 役割、ありがたみ

株式会社ジーダット 三宅 基夫 (1985 年卒)

1985 年卒の私が学部を卒業して 25 年が経ちました。その時 11 学科あった電気通信学部は、4 学科の情報理工学部へとシンプルに改組されました。その中核を「新生」知能機械工学科が担っていることを誇りに思います。自分が、50 年を迎えた機械系学科史の既に真ん中に居ることに気づくと、その間どれだけ大学での経験を活かせて来られたかと反省することばかりです。

が、今回はそれはさておき、パネルディスカッションや懇親会でのお話を拝聴して感じたことを述べさせていただきます。それは学生さんから「こんなことを学びたい」「何が学べるか知りたい」といった声があることです。受け身の姿勢に違和感を感じます。もっと積極的に、例えば「ここまで自分で調べたがここが分からない」とか「世の中に自分の知らないどんな学問・研究分野があるのか知りたい」といった声にはならないものでしょうか？私は、大学は学生の世界観を広げる応援をし、学生は自ら知識欲を満たしていくべきなのではないかと思うのです。

そう思うのは、私の社会人生活 20 年の経験からです。社会人になると、学ぶ時間も、質問できる相手も限られてきます。大学で学んだ最先端知識も風化し、自分で更新を余儀なくされます。入社直後は学べることも多いでしょうが、仕事に直結した限定知識になりますし、中堅になれば仕事の範囲が広がって、新たな知識に対する自分の理解、吸収力が頼りになります。その時活きるの、学生時代に本質で理解しておいた基礎知識に加え、持てる知識から新しい事を理解できる類推力です。大学時代にそのスキルを磨いておくことは、とても有意義なことだと思うのです。また、情報収集環境も格段に進化しましたが、専門分野の情報は日本語ばかりではありません。英文を抵抗無く読めるようになっておくことが必ず役立ちます。この点、在学中に英語を身近に感じさせていただいた酒井邦秀先生の授業に感謝しております。



私は、電通大の魅力は、盤石な基礎知識をベースに新たなテーマに柔軟に対応できるバーサティリティだと思っています。4 つの学科に集約された情報理工学部が専門知識の交流を推し進め、新たな価値を生み出していかれることを期待しています。創立 100 周年に当たる 2018 年に向け、UEC Tokyo がめざすものは「総合コミュニケーション科学」なのだと思います。人と社会と自然とのコミュニケーションとは実に夢のあるテーマだと思います。次の 50 年に向け羽ばたく機械系学科、電通大に期待しております。

機械系学科創設 50 周年式典に 参加したことについて

知能機械工学科 3 年 畑 元

6 月 26 日に機械系学科創設 50 周年式典がありました。50 周年という区切りの年に在籍しているのは何かの縁かと思いましたが、この度の式典に参加させていただきました。

機械系学科創設 50 周年式典では、学科創設から現在に至るまでの歴史を垣間見ることが出来、改めて私たちが、多くの先人が身を削り苦勞して作った学科で学ばせてもらっていることがわかりました。特に、金森哉史先生による「通機会誌のご紹介」で出てきた通機会だよりの創刊号などの紹介（田中榮先生の話が面白かったです）や、松村隆先生による「機械工場に纏わる話」からは機械工学科を創立した際にあった苦勞を知ることができ、現在の充実した環境を非常に有難く思いました。そのお話によると、創立当時は工場にある旋盤・フライス盤を誰も動かすことができなかつたため、先生自身が工場に修行へ行かれたことがあったそうです。また加工機が高価で購入できなかったときは他の大学から壊れかけた加工機を頂戴し、先生方で修復して使用していたとも仰っていました。今では当時の加工機も無く、先人の苦勞を見ることはできません。しかし、今ある充実した環境は先人の苦勞、思いがあったからこそのものだと思いました。

お二人の話の他にも渡辺滋さんからの機械系学科

研究室の50年史の製作発表や下条誠先生、酒井拓先生、石川晴雄先生によるパネルディスカッションがありました。パネルディスカッションを通して電気通信大学の目指す理想像についてわかったのですが、パネルディスカッション後に学生、OBを交えた総合討論があり、学生からは情報理工学部になったことによって他学科と合併してできた知能機械工学科に対する不満、OBからは企業側からみた大卒の新入社員に対する不満などが出ました。こうした現状と理想を聞き、そして比べてみるとまだまだ理想には遠いなど感じるとともに、理想に近づくためには教員だけではなく、やはり学生にも意識改革が求められると感じました。

今年には情報理工学部創設元年です。今回の学部(学科)編成の成果が出るのは早くて現大学院1年生が卒業する2年後、学部1年生であれば4年後、6年後になります。前の電気通信学部から情報理工学部になり、どう変わったのか?理想に近づく事はできたのか? そのときに機械系学科創設50周年式典で行ったパネルディスカッション、討論が少しでも意味あるものになっていければと思います。

50周年に関わることができる ありがたさ

- 「機械系学科研究室 Web 版 50 年史」発表 -

株式会社イオマガジン 渡辺 滋 (1997 年卒)

今回、通機会会員の皆様の前で、「機械系学科研究室 Web 版 50 年史」企画をお披露目させていただくにあたり、はじめて通機会総会に参加させていただきました。本稿では50周年記念式典の感想と「機械系学科研究室 Web 版 50 年史」企画を紹介させていただきます。

● 50 周年記念式典

最初に歴史的資料として、初期の通機会誌などの紹介がありましたが、若い?世代として非常に興味深く見せていただきました。今でこそ大先輩から現役学生の世代差が広がった通機会ですが、通機会が誕生したころは先生もOBも皆さん同世代で若かったということでしょうか。内容は、ほとんど今でいう同人誌だったことに笑みがこぼれてしまいました。もともと、通機会「誌」なので同人誌だといわれればその通りなのかもしれませんが、世代が広がったばかりに最初の同人誌感覚がなくなっているのはある意味残念かもしれません。

また、ディスカッションでは、テーマ講演として酒井先生ならびに石川先生から現状の取り組みをご紹介いただき、国立大学法人として社会において大

学の存在意義を見つめ直すさまざまな取り組みをしていることをあらためて実感できました。そういった報告を聞くと、学生(高校生)を募るためにも今回の学科再編、学部名変更は、避けて通れなかったかなと思うところでした。とはいえ、一方で、社会に送り出してからの溝は大きいようで、最後の討論はそのギャップに盛り上がり、それもまた興味深く聞かせてもらいました。現場技術への適応力を売りにしてきたのが電気通信大学卒業生だと個人的には思っておりますが、基本的な能力を含め、あらためて何をコアにしていくかは、卒業生としても深く考えさせられました。と同時に、今携わっている会社経営の立場では、個々人が、常に学習できる能力こそ必要なコアだというのを強く感じ直したところです。

● 「機械系学科研究室 Web 版 50 年史」

最後に、「機械系学科研究室 Web 版 50 年史」をご紹介します。

本企画は、一昨年に金森先生と弊社の仕事に関する話をさせていただいた折に浮上したもので、50周年を記念した Web 制作企画に弊社の e ラーニング制作ノウハウがお役に立てるありがたい機会としてプレッシャーを感じつつ企画進行中です。ここでは、現在までの具体的な機能をご紹介します。

機能 1 : 公開された年表をみる

機能 2 : 公開された OB のコメントをみる

機能 3 : ログインして会員のみ公開の OB のコメントをみる

Web でサービスを展開する特徴は機能 2 と機能 3 になります。公開または非公開のコメントを読んだり、書き込んだりすることで、連絡が途切れた OB 同士のつながりを復活できます。このつながりこそ、これからの通機会にもっとも必要なことと考えサービスを設計しております。まだ、企画の最終承認待ちですが、ぜひともよいサービスを展開していきたいと思っております。ありがとうございました。



「機械系学科研究室 Web 版 50 年史」
のデモンストレーション画面

~~~~~  
-編集係より-  
会員の皆様からの記事を募集しております。卒業生から現役学生へのメッセージなどもお寄せいただければ幸いです。ぜひ右記宛先までお送り下さい。  
〒182-8585 東京都調布市調布ヶ丘 1-5-1  
電気通信大学 知能機械工学科内  
通機会だより担当 森重、大竹